

—失われた都市の記憶を求めて—

美術市



発見

第二回

橋爪節也

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室・主任学芸員



モダン大阪の時代、近代建築が建ち並ぶ中之島界限は、パリのシテ島に見立てられた。昭和12年の観光映画『大大阪観光』も観光艇「水都」よりの眺めを讃える。近代の洋画家たちは、こうした中之島の景観に象徴される都市にモダニズムを求め、新しい美意識をキャンバスに描きとめようとした。

ミラボー橋の下、 セーヌが流れ、 “大大阪”にはモダニズムが香る

“*Sous le pont Mirabeau coule la Seine...*”

「ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ…」
アボリネール「ミラボー橋」より



「周秋蘭立像」を制作中の小出樞重
(1928年2月頃)

写真提供：芦屋市立美術館

洋画の街・大阪。それを代表する二人の個性的な洋画家、小出樞重と鍋井克之。彼らの設立した信濃橋洋画研究所の公募展は、やがて全関西洋画展へと発展する。彼らは大正末・昭和初期の「大大阪時代」のこの街に、モダニズムの美を見いだそうとした。

注目されたのが中之島界限の近代建築群である。鍋井は中之島の景観を「全く近代的な魅力を持った都会風景画」と絶賛し(『風景画を描く人へ』大正十一年)、小出も「大阪の近代的な都市風景」として、「大正橋や野田附近の工場地帯も面白く思うが、中央電信局中之島公園一帯は先ず優秀」(『上方近代雑景』、『めでたき風景』所収、昭和五年)とした。また小出は、大建築が増加するほど「都会としての構成的にして近代的な美しさ」は増加するとし、鍋井も「近代的と云ふことはそれだけかなり「魅力のある事」で、「いやでも次に生れて来るべきものの資格である」と強調した。

彼らは理想とするモダン都市と新しい時代の美の感性を、中之島の近代建築群に託して作品に結実させようとしたのである。彼ら以外の洋画家たちも中之島を描いたし、また何も写真による都会風景だけでなく、さまざま傾向の美術が大阪で描かれた。未来派、抽



小出 楯重
(1887~1931)
[市街風景(街景)]
大正14年(1925)
油彩・カンヴァス

大正14年4月、大阪市は周辺を合併して、日本最大の都市「大大阪」になる。その同じ年の9月に小出が、大江橋北詰の堂島ビルディングから西を向いて描いた「大大阪」のパノラマだ。堂島川を挟んで右が堂島浜通り、左が中之島で、朝日新聞本社、大阪堂島米穀取引所、大阪府立医科大学附属病院(後の阪大病院)などや、竣工なった大阪ビルディングが画面に詰め込まれる。小出楯重は、大阪の都心、長堀橋筋の薬種業「天水香」に生まれ、東京美術学校に学んだ。第1回二科展に出した《Nの家族》で橋牛賞を受賞、二科展で活躍する。谷崎潤一郎の『蓼食ふ虫』の挿絵も描く。大阪人らしい味のある名随筆家としても知られる。

朝日新聞社 蔵

佐伯祐三
(1898~1928)
[肥後橋風景]

大正15・昭和元年(1926) -
昭和2年(1927)
油彩・カンヴァス

30歳で没した天才画家・佐伯祐三は、現在の大阪市北区に生まれ、北野中学校(現大阪府立北野高校)から東京美術学校に学び、渡仏してパリを描いた。一時帰国中、パリを思わず硬質な空気を求めて中之島を描く。《肥後橋風景》は土佐堀川に沿って、小出の《街景》とは逆に、東方向に中之島を見たもので、手前から朝日新聞本社、日本銀行、大阪市庁舎が並ぶ。

国枝金三
(1886~1943)
[都会風景]

昭和2年(1927)
油彩・カンヴァス

国枝金三は、小出楯重、鍋井克之、黒田重太郎と信濃橋洋画研究所の創立に参加した洋画家で、二科展で活躍した。この風景は、同じ年に出来た階段建ての美津濃運動用品店の上からであろうか、淀屋橋付近から東を望み、中之島公園や難波橋が見える。塔のある建物は、明治34年頃に竣工した光本写真館。梅檀木橋の南詰にあった。



田養橋と大阪中央電信局(左)、商工会議所(右)
小出が「上方近代雑景」で「優秀」とほめたモダン風景である。
(『大大阪橋梁選集』創生社発行 昭和4年より)



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵

象絵画、超現実主義などの前衛的なアートの潮流が渦を巻きつつける…。面白いくことに小出、鍋井をはじめ、足立源一郎、青木宏峰、池島勘治郎、田村孝之介、吉原治良、佐野繁次郎など、大阪出身の洋画家には商家の「ぼんぼん」出身が多い。「大阪人の新しいもの好き」と、二十世紀の美術が都会から誕生したことをみごとに証明している。



大阪市立美術館 蔵

松本鋭次 (1894-1968)
[地下鉄工事]
昭和7年(1932)
油彩・カンヴァス

フランスにも留学し、心齋橋の丹平ハウスにあった赤松洋画研究所の講師もつとめた松本鋭次。ダンディな画家で、夫人はフランス人であった。《地下鉄工事》は、昭和7年開通の地下鉄梅田駅の工事現場を大阪鉄道管理局の上から描く。御堂筋線梅田駅と、当初、谷町線梅田駅に予定されたアーチが二つ並ぶ。画面正面を横切る省線(現JR)、真ん中の建物が阪急百貨店で、左側に阪急の線路・駅舎も見える。“大大阪”、ただいま建設中。



鍋井克之 (1888-1969)
[納涼映画会(戦況ニュース)]
昭和13年(1938)
油彩・カンヴァス

大阪市に生まれ、東京美術学校に学んだ。同校で同期が小出楯重である。大正13年に小出、国枝金三、黒田重太郎らと信濃橋洋画研究所を開設。戦後は昭和11年に二紀会を結成し、昭和33年に大阪市民文化賞を受賞。昭和39年に浪速芸術大学芸術学部長になった。小出同様、名随筆家で、『大阪ざらい物語』は、館直志(渋谷天外)脚本、藤山寛美主演の松竹新喜劇の原作になった。カラフルな画風に特色があり、野外にスクリーンを立てて映画を映すこの作品も、鍋井らしいとほけた味わいがある。

大阪市立美術館 蔵

普門 暁 (1896~1972)
[鹿、青春、光り、交叉]
大正9年(1920) 油彩・カンヴァス

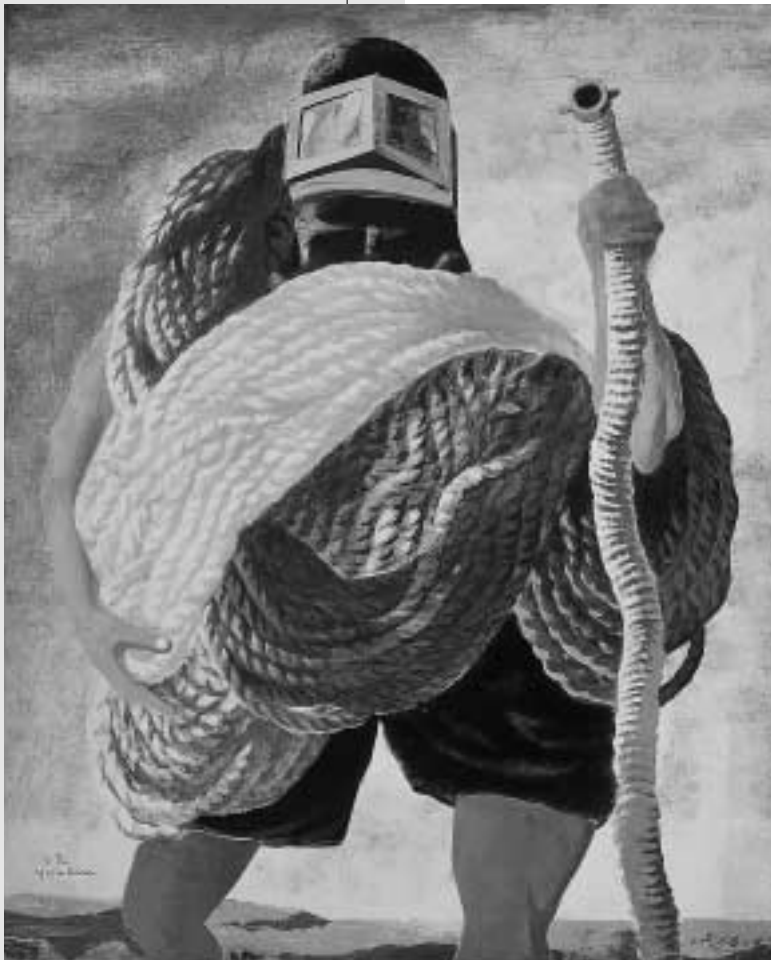
1909年の詩人マリネッティの「未来派宣言」ではじまる未来派は、電気、スピード、運動などの絵画化を試み、20世紀の機械文明や新しい都市の美を発見した。日本でも大正9年(1920)に未来派美術協会が結成される。提唱者の普門暁は奈良市に生まれ、東京高等工芸学校に学んだ。未来派美術協会展は大阪にも巡回し、普門も大阪を拠点に活動した時期がある。この絵は、故郷の奈良ゆかりの鹿をモチーフにする。

吉原治良 (1905~1972)
[縄をまとう男]
昭和6年(1931) 油彩・カンヴァス

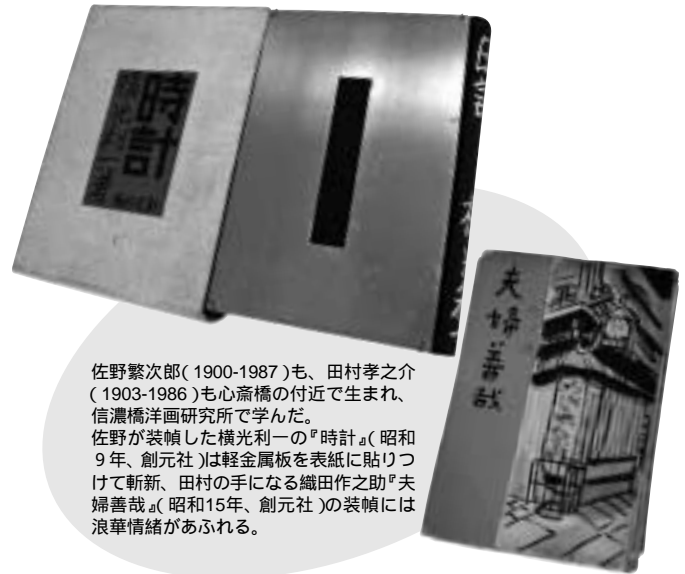
吉原治良は、大阪市東区大川町の植物油問屋に生まれ、独学で洋画を学んだ。藤田嗣治が高く評価し、パリ留学を勧められたこともある。戦前はデ・キリコや超現実主義に触発され、戦後は吉原製油株式会社シユールリアリスムの社長をしながら、前衛美術団体「具体美術協会」のリーダーとして活躍し、自社の倉庫を美術館に改造した「具体ピナコテカ」を中之島に開設した。《縄をまとう男》は、戦前の超現実主義的な雰囲気もある作品で、当時アトリエを構えた西宮の今津港周辺で見た潜水夫を描いたとされる。



奈良県立美術館 蔵



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵



佐野繁次郎(1900-1987)も、田村孝之介(1903-1986)も心齋橋の付近で生まれ、信濃橋洋画研究所で学んだ。佐野が装幀した横光利一の『時計』(昭和9年、創元社)は軽金属板を表紙に貼りつけて斬新、田村の手になる織田作之助『夫婦善哉』(昭和15年、創元社)の装幀には浪華情緒があふれる。



前列右に小出権重、同左に鍋井克之、中列中央に黒田重太郎、左に国枝金三 信濃橋洋画研究所開所式にて(1924年4月3日)